

王たるキリスト 11月21日 分かち合い

ヨハネ 18-37

教会暦の最後の日曜日に、教会は毎年、「王であるキリスト」の祭日を祝います。若い時、といつてもそんな昔のことではありません。教会はどうして、博物館に入ってしまったような王様を大事にするのだろうか、と思っていました。古代、あるいは、中世において絶対的な存在であった「王」を、20 世紀の現代、こだわるのは時代錯誤も甚だしいのでは、と思いました。イグナチオが残した「靈操」の中にも、「キリストの王国」、「二つの旗」という黙想がありますが、これにも、しばらく抵抗を感じていました。

しかし、聖書を学び、イエスラエルの歴史を学ぶにつれて、聖書の中に記され、また、教会が大事にする王の姿は、一般に考えられるものとは、まるで違う、特に、キリストを王と仰ぐことは、ほとんど正反対であることを学びました。

今日の福音で読まれた箇所は、イエスが裁きの座に引き出され、時の総督ピラトから厳しく尋問される場面です。そこには、鞭打たれ、嘲笑され、息絶え絶えになった、いわば死を待つばかりの死刑囚のようなイエスの姿があります。しかし、そこでイエスの口から出る言葉は、まさに、王にふさわしい言葉と言ってよいでしょう。ピラトは尋ねます、「お前はユダヤ人の王なのか」と。「ユダヤ人の王」、それは、イエスがお生まれになったとき、東方から不思議な星に導かれて礼拝にやってきた博士たちの言葉に表れます。「ユダヤ人の王として生まれた方は、どこにおられますか」。さらに、イエスが十字架に付けられたとき、その頭上に張り付けられた罪状書きの言葉、「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」とも合致します。「ユダヤ人の王」、人々はイエスをそう呼び、信じました。しかし、イエスはピラトの問いに、肯定も否定もしません。逆に、「あなたは自分の考えでそういうのか。それとも、ほかの者が、あなたにそう言ったのか」と。イエスは、たとえ、王であったとしても、決してユダヤ人だけの王ではなかったのです。

イエスは、さらに続けます、「わたしの国はこの世には属していない」と。協会訳では、「この世のものではない」とありました。たしかに、イエスは「国」あるいは、「王国」について話されました。王を題材にしたたとえもいくつかあります。しかし、イエスの福音の中心となった「神の国」は、この世の王が治める「王国」ではなく、神が王として支配される世界のことです。この世の「王国」に代わって、「神の王国」を打ち立てるためにイエスは来られたのです。そこは、国土や境界、軍隊や法律が人々を縛り恐れさせる、力がものを言う世界ではなく、神の愛が、すべての人を生かし、力づけ、一致させる神の愛が、静かに、浸透し、広がり、根付いてゆく世界です。イエスは、そうした「神の国」を証しし、打ち立てるために人となり、自らのすべてを十字架の上でお捧げになったのです。

「それでは、やはり王なのか」と言うピラトの問いに、イエスは「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する者は人は皆、わたしの声を聞く」、と言われます。「真理」と訳された言葉は、もとをただせば、ヘブライ語の「まこと」を意味する言葉です。ラテン語や、ギリシャ語の「真理」は、とかく学

問的な真理を連想させますが、聖書の世界で語られた、そのもととなる言葉は、神の本質を表す、「いつくしみ」(ヘセド＝愛)と並行して使われる「まこと」(エメト＝誠実、忠実)を意味します。詩編で歌われる「神の愛は力強く、そのまことは世々におよぶ」(詩編 117)のまことです。イエスが証しなさろうとしたのは、そうした神のまこと、裏切られることのない、頼りになる、そのような存在であることを、しっかり心に刻みましょう。

イエスは、神が支配される世界、神の愛が浸透する世界を広げるために来られ、そのためにすべてをお捧げになりました。それも、言葉だけでなく、自らのふるまい、業を通して、そして、何よりも、苦しみと十字架の死を通して証しなさったのです。そのような方、すべての人に神の愛を告知らせ、自ら貧しく、小さなものとなり、そのへりくだりと従順のよって、すべてのものの王とされたキリストを心から礼拝し、従う恵みを願い、この錯綜する世界に、まことの愛と平和をもたらしてくださるよう祈りましょう。(S.T.)